インタビューによる日本語能力ステージ評価法の検証

── 段階別質疑応答による面接試験評価と筆記試験評価の関連 ──

小笠原　典　子

1. はじめに

十文字学園女子大学留学生別科ではクラス分けのため，インタビューテストと日本語筆記試験からなるプレイスメントテストを学期ごとに実施している[(1)]。限られた時間でできるだけ適切なクラス配置を決定するため，まず「段階別質疑応答によるインタビューテスト」[(2)]により，仮クラス配置を行う。テスト実施からクラス配置決定までに学事日程上時間をかけることが困難であり，面接試験の結果のみで，できるだけ適切なクラス配置が求められており，面接試験のみでクラス分け仮判定[(3)]を行っている。これまでのプレイスメントテスト実施の中で，面接試験による仮判定と，その後に行われる筆記試験後のクラス分け判定の結果に大きな差はみられない。面接試験直後のクラス分け仮判定がほとんどそのまま最終のクラス配置決定になっており，短時間で実施できる留学生別科での「段階別質疑応答によるインタビューテスト」は有効にクラス分け機能を果たしていると思われる。

本稿では，これまで実施してきた留学生別科の面接試験によるクラス分け判定が，学習者の習得している日本語能力を適切に判定できているか，面接技法が学生の日本語力判定に有効であるか，この二点に関して，クラス分け筆記試験の成績と対比させ検証を行う。さらに，この面接方式が入学時のクラス分けに限らず，日本語能力の到達度を測定する，さまざまな場面で応用

可能であるかその発展性を考察する。

2. クラス分け試験の概略

面接試験

留学生別科で実施の「段階別質疑応答によるインタビューテスト」は，日本語能力測定試験 Spot（Simple Performance-Oriented Test）の開発姿勢と，評価尺度による判定法を基本としている。

「よく知っていることは聴取できるが，知らないことは聴取できないという認知的側面を利用して考案されたテスト」（1995 小林）である日本語能力測定試験 Spot の考えは面接試験にも援用できる。よく知っている日本語（文法・語彙・表現など）については適切に反応できるが，知らないことには反応できないという側面をクラス分け面接試験に応用した。日本語学習において，特に初級段階においては，多くの場合，学習事項は段階的に提示され，それに応じて日本語技能も段階的に獲得される[(4)]。段階を追って学習が進められ，学習項目が獲得されていくという学習状況を前提として，面接試験において受験者から得られる応答反応を次のようにとらえる。問われた事柄（文法・語彙・表現などの学習項目を含む質問）に対して適切な応答が得られた場合，その学習事項はすでに獲得されているとみなす。一方，適切な応答が得られなかった質問事項（文法・語彙・表現などの学習項目を含む質問）に対しては，まったく未知の学習項目であったか，あるいは，知識としては既習であっても，その時点では運用ができていないと考える。そして，適切に反応できた段階までが受験者が習得し，運用できる段階と判断し，クラス配置先を決定するのである。

面接テストの評価法としては，「発音，流暢さ，表現力，内容」などの細目的項目に対して点数評価するのではなく，評価尺度方式による評価をとる。「言語能力のレベルを簡潔に記述した評価尺度を利用する評価方法で，テストの目的に応じてレベル（領域）をわけ，評価尺度を記述し，力を評価する（1997 ニック・アンダーヒル）」方法を採用した。面接試験では，段階別に分けた学習事項（表 2）を「言語能力レベルを簡潔に記述した評価尺度」とし，「レベル（領域）」名を評価として記述した。

表1　留学生別科プレイスメントテストにおける面接

	内　　容
面接形式	質疑応答法（1人3〜4分程度）によりインタビューを行う。 » 質疑応答法は，互いに関連性のない複数の質問で構成され，難度の低い質問から始め，徐々に難度を高めていく方法である。 » この方式は，「構造中心のシラバスにしたがって学習してきた学習者の到達度を測定するのに適している。特に初級レベルの学習者に向いている（1997アンダーヒル）。」
質問項目	» 表2参照。 » 質問は代表的な初級日本語教材のシラバスにのっとって，文法項目の提示順に並べられている。 » 質問を表2の「A〜E以上」の段階にグループ分けする。このグループは配置するクラスのレベルと関連付けられており，ABCDと進むにしたがい質問の難度が増す。 » 実際のクラスでは，各段階の質問項目が学習項目となる。Bクラスではステージ B の項目について学ぶ。
面接方法	» 最下級段階（表2ではA段階）から質問を始め，その段階の応答が適切であれば，質問を次の段階に進める。 » 質問の形式，レベルの上げ下げの手法はACTFL-OPIテスト（1999牧野成一，2001牧野成一）にならう。たとえば3段階目の質問にうまく応答できなければ，一つ下の2段階目に戻る。具体的には，「いつ日本に来たか」「きのうの晩，何をしたか」「それから何をしたか」などの基本動詞を用いたやり取りに適切に反応できたら，「富士山を見たことがあるか」「試験の前は何をしなければならないか」など一段上の質問に移る。応答の様子を見ながら，段を飛ばして質問を投げかけ，あるいは段を下げて質問を続け，受験者の上限と思われる段階を見極め，その段階で質疑を終える。開始から終了まで一人当たり3〜4分程度である。 » 受験者の日本語力が中級以上と思われたら，質問方法・内容・使用語彙を抽象化していく。例えば「日本のアニメが大好きだ」と応答した受験者に対して，総合的にみて，その応答の仕方に余裕があると判断したら，「日本のアニメのすばらしい点はどこか」など裏付けとともに意見・考えを述べさせる問答に変更する。
評価法	» 個別の採点領域（文法，語彙，発音，流暢さなど）に対して単一の評価を与えるのではなく，ある評価尺度を参照しながら（1997アンダーヒル）採点する。 » 表2で表した各段階に含まれる質問事項が評価尺度となる。「可能形を使って表現できる」「〜したことがあるという文法項目を使って経験を述べることができる」などが評価尺度となり，その項目が含まれる段階名で評価を記述する。受験者の能力がどの段階に当てはまるか，その段階名（クラス名）を記述する記述評価を行う。 » たとえば，B段階に置かれている質問については的確に応答できたが，C段階の質問内容に応答できなかった場合は，B段階までの事項については運用ができると判断し，面接のクラス判定評価（配置先クラス）は「C」となる。

表2　段階別質問項目一覧

クラス	課	質問項目
A	1	» ～は～です
	2	» これ／それ／あれ
		» 所有の「の」
	3	» ここ／そこ／あそこ
	4	» 今～時です
		» ～時に verb 起きる／寝る／働く／勉強する
		» 時制／過去
	5	» ～へ行く／来る／帰る
		» 交通手段「で」
		»（人）と
	6	» ～を verb（他動詞）飲む／食べるなど
		»（場所）で「動作」
		» 誘い表現ましょう／ませんか
	7	» ～に～をあげる／もらう／書く
	8	» 形容詞現在形～は～です
		» 形容詞＋名詞
	9	» ～は～がわかる／好き
		» ～から，（理由）
	10	»（場所）に～が「存在」ある／いる
		» ～は（場所）に「存在」
	11	»（場所）に～が（数）ある／いる
		» ～は（場所）に（数）ある／いる
	12	» 形容詞過去形
		» 形容詞＋名詞過去形
		» ～は～より（比較）
		» ～が一番～（最上級）
	13	» ～は～がほしい
		» ～は～を verb たいです
		» ～は（場所）へ verb に行きます
B	14	» て形
		» ～てください
		» 今～ています
	15	» ～てもいいです
		» もっています／住んでいます／結婚しています
	16	» ～て，～て
		» ～てから～ます
		» ～は～が大阪は食べ物がおいしいです
		» 形容詞くて／で
	17	» ないでください
		» なければなりません
		» なくてもいいです
	18	» ～することができます
		» ～は～することです
		» ～の／するまえに，～します
	19	» ～たことがあります
		» ～したり，～したり
		» ～く／になります
	20	» 普通体形の導入
	21	» ～と思います
		» ～と言いました
	22	» 名詞修飾
		» これはミラーさんが買った本です
		» あそこにいる人はミラーさんです
		» きのう習った言葉を忘れました
		» ～する時間がありません
	23	» ～とき
		» ～すると
	24	» ～は～をくれます
		» ～てあげる／もらう／くれる
	25	» ～したら
		» ～しても
C	26	» ～んです
		» ～していただけませんか
	27	» 可能形
		» みえる／きこえる
		» ～ができました大きいスーパーができました

クラス	課	質問項目
C	28	» ～ながら
		» ～ています（習慣）毎日運動しています
		» ～し，～し
	29	» ～ています（瞬間動詞）窓が開いています
		» 自動詞／他動詞
		» ～てしまいました
	30	» ～てあります
		» ～ておきます
	31	» 意向形形の導入
		» ～ようと思っています
		» ～するつもりです
	32	» ～したほうがいい
		» ～するでしょう（推量）
		» ～かもしれません
	33	» 命令形形の導入
		» 禁止形形の導入
		» ～しろ／するなという意味です
		»（三人称）は～と言っていました
	34	» ～するとおりに～
		» ～したあとで～
		» ～しないで～／～して～
	35	» ～ば～
		» ～なら～
		» ～は～ば～ほど～です
	36	» ～できるように～
		» ～ようになりました
		» ～ようにしています
	37	» 受身形
	38	» ～するのは～です
		» ～するのが～です
		» ～するのを～ました
		» ～したのは～です
	39	» ～して（理由）びっくりしました
		» ～くて／で（理由）わかりません
		» ～ので～
	40	»「疑問詞」＋するか～ます
		» ～するかどうか～
		» ～してみます
D	41	» ～をいただく／くださる／やる
		» ～していただく／くださる／やる
	42	» ～するために
		» ～は～するのに～
	43	» ～そうです（推量／様態）
		» ～してきます
	44	» ～しすぎました
		» ～しやすいです
		» ～く／にします
		» 形容詞／副詞楽しい／楽しく踊りましょう
	45	» ～場合は～
		» ～したのに～
	46	» ～する／している／したところです
		» ～したばかりです
		» ～するはずです
	47	» ～そうです（伝聞）
		» ～ようです（推量）
	48	» 使　役
	49	» 敬　語（受身形）
		（お V になります）
		（不規則尊敬語）いらっしゃる／なさる
	50	» 敬語（お V します）
		（不規則謙譲語）まいる／いただく
E以上	質問例	» いま興味があることについて述べる
		» 最近の出来事について，知っていることを述べる
		» 二つの事柄を比較する
		» 日本について知っていることについて述べる
		» ある事柄について裏付けのある意見を述べる

A・B・C・D・E はクラス名で，A クラスは入門程度，B クラス終了で日本語能力試験 N5（旧4級），C・D クラス終了で日本語能力試験 N4（旧3級）程度。E クラス以上が中級段階となる。各クラスにおかれている質問項目をそのクラスで学習することになる。

表1は面接試験の概略をまとめたものである。

筆記試験

筆記試験問題は第1部〜第7部からなり，部が進むにつれ難度が増すように構成されている。出題内容と配点は資料1に示すとおりである。

初級段階は代表的な初級テキストのシラバスに沿って問題を提示している。表3に示すように，初級前半は，日本語能力試験N5（旧4級），後半は，日本語能力試験N4（旧3級）出題範囲とほぼ同等である。中級前半は，日本語能力試験N3（旧3〜2級の間），後半は同N2（旧2級）の出題範囲に準じている。

面接試験，筆記試験ともに代表的な日本語教科書のシラバスを出題基準としているため，面接質問事項のグループ（A〜E以上）と筆記試験の問題の部（第○○部）は日本語能力段階としてほぼ等しい[5]。例えば，筆記試験第2部の問題（文法・語彙・表現）と面接B段階の質問項目のレベルはほぼ同等である。

筆記試験得点は，初級前半，初級後半，初級総合，中級前半，中級後半，中級総合，全体総合別にそれぞれの正答率で表される。

筆記試験実施時間は60分である。全体の問題数が多いので，受験者がその場で熟考する時間はなく，その事柄を知っているか知らないか，即座に判断し，次に進まなければならない。初級前半程度の段階にある学生には，あ

表3　筆記試験の出題レベル

部	面接試験質問段階との対応	段　　階	出題レベル（日本語能力試験に準拠）
1	A	初　級　前　半	N5（4級）
2	B	初　級　前　半	N5（4級）
3	C	初　級　後　半	N5〜4（4〜3級）
4	D	初　級　後　半	N4（3級）
5	E	中　級　前　半	N4〜3（3級〜2級）
6	E〜H	中　級　後　半	N3〜2（2級）
7	H以上	中級後半〜上級以上	N2〜1（2級〜1級）

る部から以降の答案が白紙になることも多くみられる。

3. クラス分け試験の結果

(1) 対　象

2008年9月入学生　61名　　2009年4月入学生　36名
2009年9月入学生　53名　　2010年4月入学生　39名
2010年9月入学生　25名
　計214名（中国208名，韓国4名，ミャンマー1名，スリランカ1名）

(2) 面接試験直後のクラス分け結果（筆記試験受験前判定）

クラス	B	C	D	E	H	計
学生数	63	59	34	37	21	214

(3) 筆記試験との関連

表4，表5は筆記試験受験者全員の正答率の平均，中央値を示したものである。クラス名は，実際に配置されたクラスではなく，面接試験直後（筆記試験を受験する前）に判定されたクラス分類である。以後の図表のクラス名

表4　筆記試験平均値（正答率）

クラス	初級							中級					総合
	前半			後半			総合	前半	後半（7部は上級を含む）			総合	
	1部	2部	計	3部	4部	計		5部	6部	7部	計		
B	39.3	26.9	30.1	14.3	8.4	10.8	21.0	3.4	3.1	0.0	1.8	2.5	13.8
C	70.0	54.1	57.5	31.7	19.1	24.2	41.6	10.9	6.3	0.0	3.6	6.1	28.2
D	73.7	62.9	65.7	45.4	28.9	35.6	50.6	18.5	13.7	1.3	8.4	12.2	36.1
E	77.4	67.3	70.0	52.7	39.6	45.0	57.6	35.1	17.3	2.0	10.9	20.1	43.3
H	83.3	73.6	71.4	59.9	54.1	56.5	66.5	58.3	42.4	20.1	32.9	42.5	57.4
全体	64.1	51.7	54.3	35.1	24.5	28.8	42.2	18.7	12.0	2.5	8.0	12.0	30.7

表 5　筆記試験中央値（正答率）

クラス	初級							中級					総合
	前半			後半			総合	前半	後半（7部は上級を含む）			総合	
	1部	2部	計	3部	4部	計		5部	6部	7部	計		
B	38.7	25.7	30.3	12.9	6.7	9.2	21.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	13.5
C	67.7	54.3	57.6	35.5	17.8	22.4	40.1	9.1	6.5	0.0	3.7	4.6	27.9
D	77.4	58.6	65.9	43.5	26.7	33.6	50.4	12.1	6.5	0.0	3.7	10.3	35.2
E	77.4	65.7	69.7	51.6	40.0	44.7	55.6	33.3	19.4	0.0	11.1	19.5	41.5
H	83.9	74.3	69.7	64.5	57.8	59.2	64.1	57.6	38.7	13.0	37.0	40.2	59.4
全体	67.7	54.3	56.1	35.5	20.0	26.3	42.6	12.1	6.5	0.0	3.7	6.9	30.3

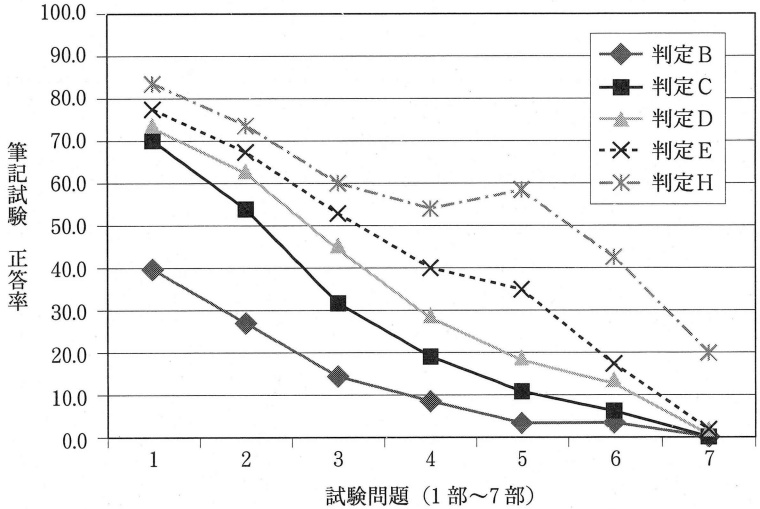

図 1　判定クラス別　筆記試験正答率（平均値）の推移

はすべてこれを用いる。

判定クラス別に筆記問題の出題部（第 1 部～第 7 部）の正答率（平均値）をプロットしたものが図 1 である。判定クラス別に，各部門の平均正答率の推移を表した。

筆記試験全体の正答率（筆記試験問題第1部～第7部の全体の正答率）について，全体の人数分布の状況を示したのが図2である。正答率得点幅を10として，全受験者の分布状態を表した。また，初級段階（筆記問題第1部～第

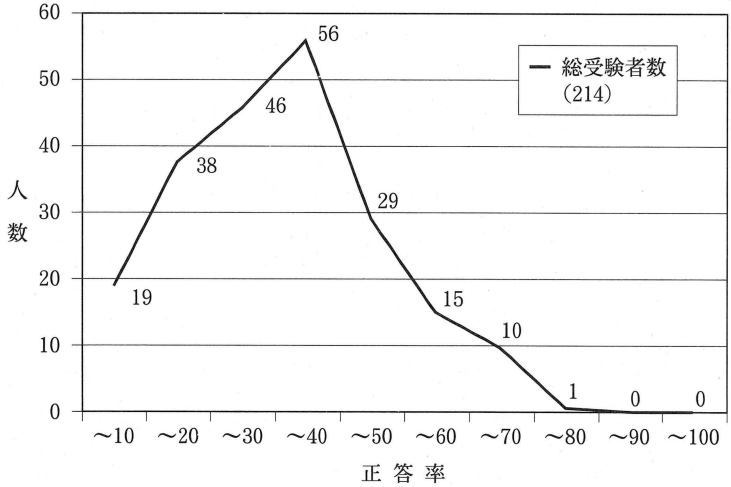

図2　筆記試験正答率分布（グラフ内の数字は分布人数）

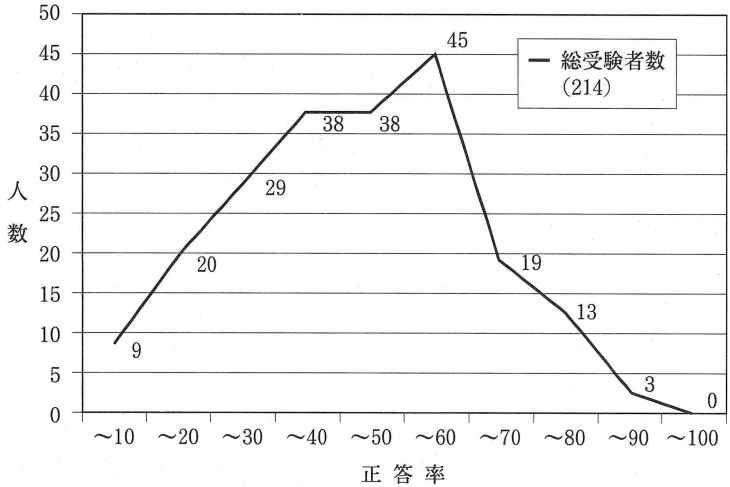

図3　初級レベル問題に対する正答率の分布

4部）に焦点を当てて全受験者の正答率分布状況を表したものが図3である。

図4-①～図4-⑤に示す5つのグラフは，筆記試験問題の第1部から第4部まで，それぞれの部ごとに，正答率人数分布を面接評価のクラス別に記したものである。全受験者の全体の平均正答率推移は図2に示したが，図4では全受験者の部門別正答率分布を判定クラス別に示した。

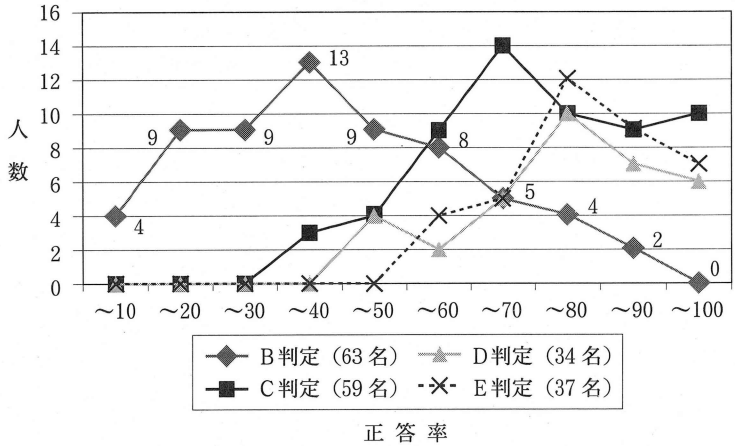

図4-①　問題部門別 第1部 正答率の人数分布（グラフ内数字はB判定の人数）

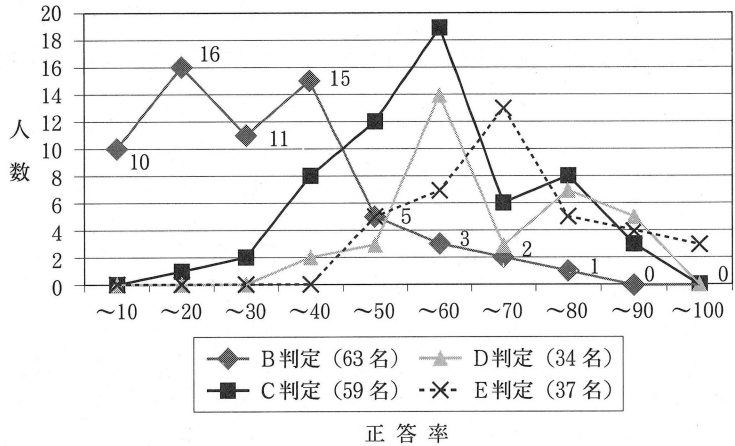

図4-②　問題部門別 第2部 正答率の人数分布（グラフ内数字はB判定の人数）

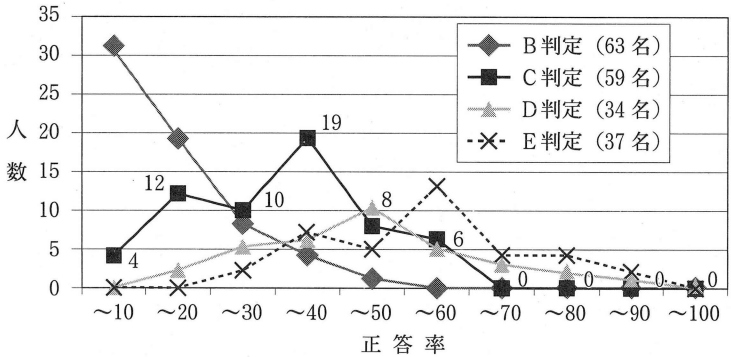

図 4-③　問題部門別 第３部 正答率の人数分布（グラフ内数字はＣ判定の人数）

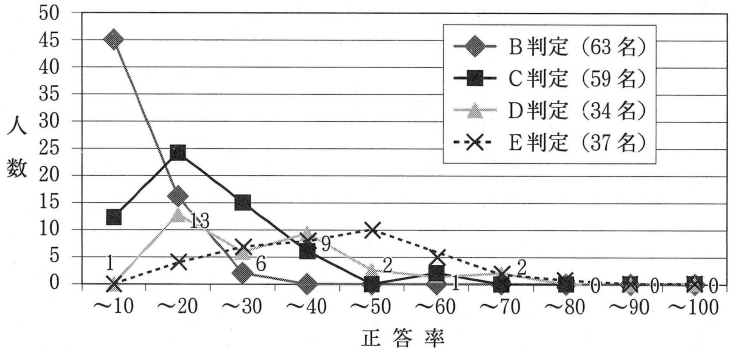

図 4-④　問題部門別 第４部 正答率の人数分布（グラフ内数字はＤ判定の人数）

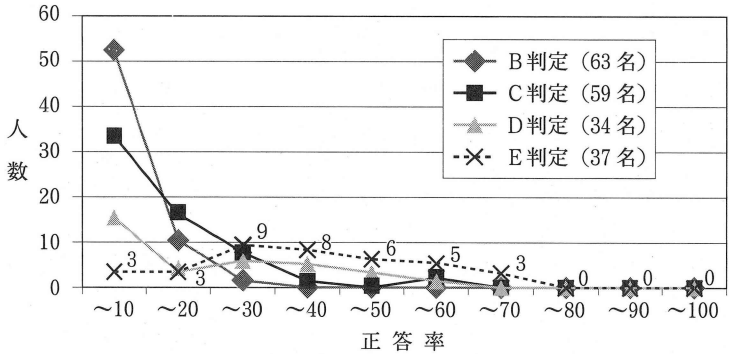

図 4-⑤　問題部門別 第５部 正答率の人数分布（グラフ内数字はＥ判定の人数）

4. 考　　察

全体的な成績傾向

筆記試験問題は第1部から第7部に向けて順に難度が増していくので，どの判定段階でみても，1部が最も正答率が高いことは予想されることである。また，判定段階はA, B, C, D, E…の順に日本語能力が上がっていくように設定されているため，試験では，どの部においても判定Hの正答率が最も高く，部の進行に合わせ正答率が下がることも予想される結果である。このことは図1から理解できる。

実際のプレイスメント試験においては，判定段階B〜Eは面接の質問応答によってのみ判断された結果であるので，面接終了の段階では，筆記試験の結果がどのようであるかは不明のままであった。しかし，面接判定結果通りの正答率のカーブを描いていることが図1より見られ，面接による判定が筆記試験の結果に等しいといえるであろう。

初級段階の成績傾向

留学生別科に入学する学生の日本語レベルに関しては，少なくとも日本語能力試験4級相当の力を持っていることが望ましいとされている。実際に入学者のもっとも多い層が日本語能力試験3〜4級相当レベルである。クラス分け筆記試験の得点構成からみると（資料1），初級段階は全体の約60%を占め，その初級で60%の正答率を得るとすると（日本語能力試験3級の合格ラインは正答率60%），日本語能力試験3級程度の力があれば留学生別科筆記試験ではおよそ40%の正答率になると推測できる。そうであれば，正答率40%を頂点に，それ以下に受験者が集まっていること示している図2より，留学生別科への入学者の中心層は初級段階であると言えるのではないか。

この傾向は初級段階の問題別正答率に焦点を当てた図3からも読み取れる。上述の通り，初級レベルの問題への正答率が60%程度であれば，日本語能力試験3級レベル相当の力が推測できるのと同様，初級前半の力が求められる日本語能力試験4級程度の受験者は，第1部・第2部の正答率で60%の

正答率が求められる（日本語能力試験4級の合格ラインは正答率60%）。これを初級全体の問題から考えれば，30%以上の正答が望まれる。さて，図3を見ると，正答率60%をピークに正答受験者が急激に落ちていることがわかる。留学生別科への入学者の多くは初級段階にいることが見て取れる。

段階別面接による評価と筆記試験成績の関連

(1) 段階B判定について

再びクラス判定について述べるが，面接試験でBクラス判定を受けた受験者には実際にはA判定とされる学生も含まれる。現在開講されているクラス名に合わせて，便宜上，最下のクラスに判定されるものを段階B判定としてまとめたためである。このB判定を受けた学生は，面接質問項目でA段階の内容には適切に応答できたが，B段階以上の項目に対しては適切に応答できなかった受験者である。面接の質問項目A段階というのは筆記試験の問題段階で言えば第1部に相当し，質問項目B段階というのは筆記試験の問題レベル第2部に相当する。面接において受験者の日本語力が正しく評価されているとすれば，面接でB段階評価を受けた学生群は，筆記試験第1部の問題については何とか解答できたが，第2部の問題に正しく解答するには困難が伴い，第2部門の問題への解答が限界であると考えられる。

このように考えて図4-①，図4-②よりB判定の学生の正答率分布をみると，第1部の問題に対して5割近くの学生が正答率40%を超えているが，第2部の問題に対して，50%の正答率を超える割合は1割にも満たない。第2部の問題はほとんど理解されていなかったと推測できる。面接でB判定を受けた学生は，筆記試験の結果でもクラス配置はBで適切であったことになり，面接試験の判定結果が筆記試験の結果によっても裏付けられたといえるであろう。

(2) 段階C判定について

面接で段階C判定を受けた学生は，面接質問項目でB段階の内容には適切に応答できたが，C段階以上の項目に対しては適切に応答できなかった学生である。面接質問項目でB段階というのは，筆記試験の問題段階で言えば第2部に相当し，質問項目C段階は筆記試験の問題レベル第3部に相当

する。つまり，筆記試験第1部の問題については比較的容易に解答ができ，第2部の問題には限界に近いながらも正しく解答できるが，第3部の問題に対しては正しく解答することはかなり難しくなると予想される。図4-①，②，③よりC判定の学生の正答率分布をみると，第1部の問題に対して9割近くの学生が正答率50%を超え，ほぼ5割の学生が正答率70%を超えている。第2部の問題に対しては50%の正答率を超える割合は4割弱になり，第3部の問題に対しては，正答率50%の学生の割合はほぼ9割に上った。第3部の問題は全く理解されなかったと推測できる。この結果からも，面接でC判定を受けた学生は，筆記試験の結果でもクラス配置はCで適切であったことになり，やはり面接試験の判定が筆記試験の結果によっても認められるであろう。

(3) 段階D判定について

面接で段階D判定となった学生をみると，第1部，第2部の問題に対しては，60%の正答率を獲得した学生はそれぞれ8割強，5割弱であったが，第3部で正答率50%以上をとった学生は3割程度となり，第4部の問題では，50%の正答率を得た学生は1割程度に過ぎなかった。初級前半の学習項目定着度が高く，後半に進むにつれ定着度が落ちることが認められるが，後半部分の定着度が悪い点こそ段階D判定のレベルを示している。図4-①～④のD判定学生の結果からも同様に，面接試験の判定結果が筆記試験結果に表れていると言えるだろう。

(4) 段階E判定について

最後に，面接で段階E判定を得た学生群について試験結果を考察する。面接でE判定を受けるということは，すでに初級の学習が終わり，初級で学習する事柄が比較的良く定着しているとみなされたということである。これが筆記試験の結果でも裏付けられるには，初級の各部門での正答率が50～60%以上であることが求められる。

図4-①～⑤で，第1部から結果をみると，第1部では正答率60%以上を得た学生が9割を占め，第2部では7割弱の学生が正答率60%以上であった。このうち，正答率が80%を超える学生の割合は，それぞれ4割強，2

割強であった。第3部になると正答率50%以上の学生が6割，60%以上の学生が3割程度であった。第4部では正答率50%を超える学生は2割強に落ち，約半数の学生が正答率40%以上であった。段階E判定をうけた学生群は，初級前・中半までは比較的高い学習定着率を示しているが，初級から中級へ移行する段階での定着が低い学生も含まれていると言えるだろう。

第5部は中級段階からの出題であるが，ここで正答率50%を得た学生は2割に上った。E判定はこれから本格的に中級段階に入ると判断される段階であるので，この2割の学生はクラスの中で成績上位者になるものと推測される。正答率が高かったこの2割の学生が，第4部門でも50%以上の正答率を獲得していたなら，この学生群の日本語力はもう一段上のクラスであるとも推測される。明らかに上級段階にある学生と中級に移行する段階の学生との力の差は面接試験のみで認められるが，中級のどの段階まで進んでいるのか，これは面接だけの判定では見抜けないことである[(6)]。しかしながら，面接でD判定を受けた学生と，E判定を受けた学生の日本語力の違いは筆記試験の成績にもしっかりとあらわれている。

5. まとめと今後の課題

面接試験におけるB～Eの段階別判定結果を筆記試験の成績と対比させながら見てきたが，どの段階判定においても，その判定レベルに相当する筆記試験の結果が得られていることが見られた。これまでのプレイスメントテスト実施経験から，面接試験のみで大まかなクラス分け判定ができていると理解していたが，筆記試験の結果と合わせ考察すると，面接試験の判定は，特に初級段階のクラス分けでは筆記試験の結果ともよく対応し，有効にクラス分け判定が行われていたと言えるであろう。数分間の面接試験による学生のレベル判定が筆記試験の成績にも裏付けされているという結果をえることができたのではないだろうか。しかし，なぜ短時間の面接試験だけで有効と考えられる判定が可能だったのだろうか。

第一に，面接試験，筆記試験の出題が準拠している初級段階のシラバスがどの教材を使ってもほぼ同じで，学習項目の提示順も同じような構成であることが理由として挙げられる。多くの受験者はこれらの教材で学習を重ね，

同じような進度で積み上げ式に知識を獲得してきたため，面接の質疑応答で理解できた内容は筆記試験でも理解できたため，結果に関連性が見られたと推測できる。

第二に，留学生の日本語学習過程において，特に「聞く」「話す」学習が不足していると考えられるが，この苦手な部分にこそ「運用できる能力レベル」が現れやすいためではないだろうか。頭で理解できている学習項目でも，うまく運用できないものが多い。反対に，実際に自在に操れる項目はしっかり習得できている事柄であるといえるであろう。まさに，「よく知っていることは聴取できるが，知らないことは聴取できない」のである。本当に理解できている事柄だからこそ短時間の質疑応答方式の面接で，身についている日本語力が現れるのであろう。面接判定では，「身についている事柄は的確に応答できるはず」という点を重視しているため，口頭で表出できた能力が筆記試験結果にも反映されたのであると考えられる(7)。

第三には，現在多くの初級段階でとられている教授法が，項目積み上げ方式であることが理由として挙げられる。文法積み上げ式学習は日本語能力試験などの日本語力到達度を測定する試験の出題形式からも理解できる。どのぐらい，どのようなテキストを用いて学習すれば，どの程度の学習事項が身についているはずだと推測できるのである。

以上の通り面接試験の判定と筆記試験の結果を対比することで，「段階別質疑応答によるインタビューテスト」によって，受験学生の日本語力を判断し，大きくずれることなくクラス分け判定ができているということが見られ，「面接のみでかなり的確にクラス分けができているはずだ」とこれまで経験的に感じていたことと一致した。留学生別科で実施しているクラス分け面接試験で，「学習者の習得している日本語能力を適切に判定できているか」，また，「この面接技法が学生の日本語力判定に有効であるか」，という二点については確認できたといえるのではないだろうか。

学習者から口頭で表現される事柄が「獲得している日本語技能を運用した結果」であるとすれば，今後目的が異なるさまざまなインタビューテストの場面で，学習者の発話を各ステージに振り分けて考えていくことで，この面接法が生かされることもあるのではないだろうか。今後は以下の事柄が課題として残るが，この面接試験の応用範囲は広がるのではないかと考える。

a. なぜ質疑応答方式の短時間の面接試験で，筆記試験の結果と同等の判定が可能であるのか。対象学生の地域，学習状況が限定されているからか，あるいは偶然の結果であったのか，推測できる事柄はすでに述べたが，この理由に関しては客観的なさらなる考察が必要である。

b. 外れ値の原因は何か。音声・発話教育をさほど受けていない学習者の場合，知識はあるが話せないというケースがある。一方で，外地の日本語教育機関においても，日本人教師を増員するなどして発話教育にも力を入れつつあるため，発話が苦手というのは個体特徴と考えられるかどうか。

c. 留学生別科での面接方式では，「発音」「流暢さ」などの細目より，既習の学習項目を含んだ質問に適切に反応できるかどうかを優先させている。ほかの試験場面への応用を検討するにあたり，「面接における質疑内容」，「各ステージ内での質疑内容の固定化」，「質問方法，判定の一般化」「判定誤差の回避」などの分析が必要で，これは今後の課題として残る問題である。

《注》

（1） 面接試験は新入学留学生のみを対象に行う。筆記試験は在籍留学生，新入学留学生全員を対象に同一の問題で実施する。

（2） いわゆるQ＆Aの質疑によるインタビューを行う。日本語能力をレベルに合わせ複数の段階（ステージ）に分け，その段階レベルに応じた質問文を各ステージにあらかじめ複数個分配しておく（試験手続の項に詳述）。試験官はこの能力レベル別に分類されたステージから質問文を選択し，受験者に質問をし，一人当たり3〜4分のインタビューを実施する。段階別に分かれた質問文を用いての面接試験であるため，留学生別科では「段階別質疑応答によるインタビューテスト」と称している。

（3） 新入学留学生は，在籍留学生のクラスに能力に合わせ配置されることになる。クラスサイズの問題もあり，人数調整が必要になる場合もあるため，筆記試験の採点結果を待たずに面接試験直後にできるだけ的確な仮クラス配置が必須になる。

（4） 日本語の初級段階の教授に関しては，場面シラバス，機能シラバスなどをとる場合があるが，多くは，構造的に学習事項が積み上げられていく方法をとっている。テキストによって，学習項目の提示順は多少の異なりはあるものの，大きな違いではない。初級段階のテキストはほとんど2巻からなり，第1巻で

は日本語能力試験N5（旧4級），第2巻では日本語能力試験N4（旧3級）に出題される文型項目が学習事項として配置されている。

中級以降の学習項目はテキストによって内容，提示順が異なる。しかし，日本語能力試験N3, N2（旧2級まで）は出題範囲として文型，表現などが提示されているため，中上級の教材では読解資料として生教材を用いながら，積み上げ方式をとっている場合が多い。

（5） インタビューテストの質問項目も，筆記試験の出題事項も代表的な日本語初級教材「みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ」（スリーエーネットワーク）の学習シラバスに準じている。面接においてA段階の質問項（学習事項）は筆記試験では第1部で出題される項目（文法・語彙・表現など）に等しい。面接質問項目B段階と筆記試験第2部の問題レベルは同等である。配置先クラス（Bクラス，Cクラス……）のレベルも筆記試験，面接試験の段階と一致する。基準となる前述の初級教材は，海外の日本語教育機関でも初級クラスのテキストとして広く採用されている。

（6） 実際のクラス判定では筆記試験ののち，再調整を行うため，筆記試験で一段上の成績をとったものはそれに合わせたクラスに配置される。

（7） 本稿の分析では，最終的なクラス配置が面接試験と異なっていた学生に対しての分析を行っていない。「面接場面で極度に緊張して，発話が思うようにいかなかった」「来日直後で何をやっているのか状況がつかめなかった」「筆記試験は得意だが，会話は苦手である」「来日までに日本語を使う機会がなかった」「自国での日本語学習は自学だったため，面接形式で話した経験がない」ので，面接試験でよい結果が出せなかったという声は学生から上がっている。反対に，「自国での学習経験が，友人，仕事仲間から会話を中心に学んだので，日常の話題なら，きちんとは話せないながらなんとか通じるが，文法がわからないので筆記試験が全然できなかった」というケースもある。こうしたいわゆる「外れ値」についても，研究手法，分析方法の検討とともに今後の課題である。

参考文献

ティム・マクナマラ著　伊藤祐朗，三枝令子，島田めぐみ，野口裕之訳（2004）「言語テスティング概論」スリーエーネットワーク

ニック・アンダーヒル著（1997）村瀬五郎，豊住誠，萬谷隆一訳「スピーキングの指導とテスト ── 実例ハンドブック」桐原書店

小野塚若菜　島田めぐみ（2008）「日本語教師のためのテスト分析入門」スリーエーネットワーク

青山眞子（2003）「口頭能力試験開発についての中間報告 ── 日本語能力試験の現在の取り組み」日本語国際センター起用（Vol. 13）p. 155-160

岩崎典子（2002）「日本語能力試験（spot）の得点とACTFL口頭能力測定（OPI）のレベルの関係について」日本語教育（Vol. 114）p. 100-105

片山朋子（1988）「海外で学ぶ初級日本語学習者のための口頭テストの作成」東京

家政学院大学紀要（Vol. 38）p. 191-203
小林典子，フォード丹羽順子，山元啓史（1995）「日本語能力簡易試験（spot）の得点分布傾向 ── 中上級向けテストと初級向けテスト」筑波大学留学生センター日本語教育論集（Vol. 12）p. 107-119
小林典子，山元啓史（1997）「日本語能力の測定 ── 学習者特性と spot 得点の関係」筑波大学留学生センター日本語教育論集（Vol. 12）p. 125-137
小林典子（2003）「SPOT による日本語能力の測定」日本行動軽量学会大会発表論文抄録集（31）p. 110-113
島田めぐみ，三枝令子，野口裕之（2006）「日本語 Can-do-statements を利用した言語行動記述の試み ── 日本語能力試験受験者を対象として ──」日本語教育論集（Vol. 16）p. 75-88
下瀬川慧子（1999）「日本語話し方技法シラバスチェックリスト　試案」東海大学留学生センター紀要（Vol. 19）p. 1-15
中村洋一（2002）「テストで言語能力は測れるか ── 言語テストデータ分析入門」桐原書店
仁科浩美（2007）「口頭テストにおける観点別評価 ── 日本語教師による評価と発話との関係について」言語科学論集（Vol. 10）p. 10-24
牧野成一（1999）「ACTFL 言語運用能力基準 ── 話技能（1999 年改訂版）」アルク
牧野成一，蒲田修，山内博之，齊藤眞理子，萩原雅佳子，伊藤とく美，池崎美代子，中島和子（2001）「ACTFL-OPI 入門 ── 日本語学習者の話す力を客観的に測る」アルク
村野良子（1991）「ACTFL の OPI テスト ── 構成と評価基準」ICU 日本語教育センター紀要（Vol. 1）p. 172-175
日本テスト学会（2007）「テスト・スタンダード ── 日本のテストの将来に向けて」金子書房
日本国際教育支援協会編（2006）「日本語能力試験出題基準（改定版）」凡人社
「みんなの日本語初級Ⅰ」「みんなの日本語初級Ⅱ」スリーエーネットワーク
日本語 OPI 研究会（1999）ACTFL-OPI 試験官養成マニュアル」アルク

資料1　筆記問題と出題レベル

レベル（課）

【第1部】初級a（1〜13）

問題	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	小計
	助詞 1×6	動詞 1×4	副詞 3×3	疑問詞 2×3	接続詞 3×2	／31

【第2部】初級b（14〜22）

問題	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	小計
	助詞 1×6	動詞① 1×5	動詞② 2×5	疑問詞 1×2	接続詞 3×2	副詞 3×2	／35

／66

【第3部】初級c（23〜40）

問題	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	小計
	助詞 1×6	動詞① 1×5	動詞② 2×8	副詞 1×4	／31

【第4部】初級d（41〜50）

問題	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	小計
	助詞 1×6	動詞① 1×5	副詞 3×4	接続詞 1×2	動詞② 2×5	読解 10	／45

／76

／142

【第5部】中級（文化Ⅰ）

問題	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	小計
	助詞 2×6	機能語 3×5	接続詞 3×2	／33

／33

【第6部】中級（文化Ⅱ）（2級）

問題	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	小計
	副詞 3×5	接続詞 2×4	機能語 2×4	／31

【第7部】上級（2〜1級）

問題	Ⅰ	Ⅱ	小計
	副詞 4×2	読解 15	／23

／54

／87